

俳人成田千空研究会

千空研究

第1号

発会にあたって

わが国を代表する俳人のひとりであり、わたしたちの敬愛する千空さんが亡くなってから七年になりました。昨春秋、青森県近代文学館において「成田千空展」が開かれ、好評のうちに終了しました。千空さんを知る人にとっても、新しい発見のある興味深い展示でした。

「作品と批評は車の両輪である」とは、千空さんの持論でした。そして、「いつの日か、千空研究が始まるんだろうか」と、冗談まじりに言っていたことを思い出しました。

そこで、没後十年に『評伝 成田千空』（仮題）刊行を目標とし、俳人 成田千空研究会を勝手に立ち上げることにしました。

当分は会合など開かず、資料収集と千空さんと関わりの方々の声を集めます。その成果を会報『千空研究』として、会員と文学館等にお届けします。よろしくご協力をお願い申し上げます。

青森文芸出版

佐々木達司

成田千空（なりた せんくう）

日本を代表する戦後俳人の一人で、蛇笏賞受賞者。本名、成田力。

1921年（大正10年）3月31日、青森市に父成田伝吾、母ナカの四男として生まれる。青森市立新町尋常小学校を経て青森県立青森工業学校機械科を卒業。

1939年、富士航空計器（東京）に入社するが、1941年肺結核のため帰郷、療養中に俳句を始め、「松濤社」の高松玉麗に師事。

1943年、「青森俳句会」に参加。大野林火『現代の秀句』で中村草田男に注目する。

1945年、青森市空襲。8月15日敗戦。

1946年、母方の飯詰村（現五所川原市）に移住し、帰農生活五年。青森俳句会『暖鳥』創刊同人。中村草田男主宰『萬緑』創刊に参加。



1951年、石塚市子と結婚。8月下旬東奥日報社主催、青森県俳句大会に招かれた中村草田男と1週間行動を共にし感化を受ける。詩と短歌と俳句の会「津軽詩話会」を結成。

1953年、第1回萬緑賞受賞。五所川原俳句会結成、代表となる。

1965年、来青の金子兜太らと十三湖吟行。

1976年、句集『地霊』刊行。

1986年、青森県文芸協会理事長に就任。

1987年、青森県文化賞受賞。

1988年、『萬緑』選者となる。句集『人日』で俳人協会賞受賞。

1989年、東奥賞受賞。句碑「行き合はん岬は草の花ただみ」が深浦町行合岬に建立される。

1990年、句碑「大粒の雨降る青田母のくに」が、五所川原市菊ヶ丘運動公園に建立される。

1998年、句集『白光』で蛇笏賞受賞。

2001年、句集『忘年』で第16回日本詩歌文学館賞受賞。蛇笏賞選考委員、萬緑代表就任。

2004年、ふかうら文学館開館。千空の間も再現。みなづき賞受賞。五所川原市名誉市民。

2005年、読売新聞俳壇選者。

2007年、『十方吟』刊行。11月17日、86

歳8か月で没。『俳句』1月号へ8句出稿、「寒

夕焼に焼き滅ぼさん癌の身は」が絶筆となる。

2009年『俳句は歓びの文学』刊行。

2011年 脚注『成田千空集』刊行。

2014年10月11日から11月24日まで、青森

県近代文学館において、企画展「成田千空」。

―「成田千空研究会」設立に寄せて―

青森県近代文学館 企画展 「成田千空」を振り返って

齋藤 美穂

五所川原での生活も今年で二十六年、ふるさと神奈川で過ごした年月とほぼ同じ長さになりました。気がつくくと、「ご出身は」と尋ねられることも少なくなり、最初は戸惑いを感じていた土地の言葉や生活習慣も、お国自慢よろしく語っている私があります。私はこの土地が好き。でも、その「好き」は、ここで生まれ育った人とはちょっと違う「好き」かもしれません。季節ごとに味わえる多種多様な食材や心身を癒してくれる温泉はもちろん、白鳥の群れを追って見上げた空、毎年子ども成長に合わせて揃えた祭り半纏、除雪の苦労を共有し励まし合う冬の朝など、今でも新鮮な魅力です。ここに暮らし始めてから今日までの「好き」の数々。「ふーん……そったこと」という声が聞こえてきそうですが。

四年前から青森県近代文学館に勤務し、私の「好き」はその分野を広げながら増え続けています。青森県の魅力は豊かな天然資源だけではなく、独自の精神風土から育まれた文学的資質と文芸の伝統。石坂洋次郎、高木恭造、太宰治、三浦哲郎、寺山修司……そのほか多くの優れた文学者を輩出する青森県は全国有数の文学県でもあります。かねて文学館の建設が待望される中、県立図書館の新築を機に開設された青森県近代文学

館は、平成二十六年三月に二十周年を迎えました。全国的にも珍しく、一つの建物に県立図書館と文学館が併設されているというメリットを活かしながら、青森県ゆかりの文学資料を収集・保存し、展示や研究への活用をすすめています。

さて、開館二十周年という記念の年にあたり、秋の企画展で青森を代表する俳人「成田千空」展が開催されました。今回は、私が「俳人 成田千空研究会」に関わるきっかけとなった企画展についてお話ししたいと思います。

県近代文学館の常設展示室には芥川賞・直木賞作家や現在まで多くの読者を持つ国民的な人気作家をはじめ日本の近代文学史上で先駆的な役割を果たした文学者らがひしめき、他県の文学館からは羨望のまなざしで見られているそうです。その中で、没後七年になる俳人・成田千空は、その業績からいって企画展開催が待たれた文学者のひとりです。千空研究は今後県内外で本格的に進められると思いますが、企画展「成田千空」は、その第一歩としてようやく実現したのでした。

私はこの企画を知った当初、五所川原市民としてたいへん嬉しく、誇らしく思いました。私の義父母も俳句に親しんでおりましたし、千空さんの営む書店やお住まいもご近所で、全く存じ上げない方ではなかったからです。個人的には、文学館解説員としての任期が終了する年でもあり、地元作家が大きく取り上げられるのだから大いに宣伝をして、地元五所川原の皆さんに成田千空をもっと知っていただく、それが文学館勤務の最後の年にできること――そんな風に考えたのでした。しかし、後になって私は、自分こそ成田千空について何も知ってはいなかったことに気付かさ

れるのです。

青森市生まれの成田千空は、戦後母の実家のある五所川原に移住し、平成十九年に八十六歳の生涯を閉じるまで五所川原で過ごしました。青森県俳壇の中心的存在として、また俳人・中村草田男の愛弟子として中央の俳壇でも高く評価されました。萬緑賞、俳人協会賞、蛇笏賞など俳句界で權威ある賞を受賞していますが、あくまでも棲む所は五所川原、作品もこの北の大地より生み続け、全国俳壇に「東北に千空あり」と称えられた俳人です。

毎朝ご自宅から書店まで重そうな自転車を漕いで通われる素朴な風貌、所狭しと積み上げられた本に囲まれて座っている寡黙な店主、五所川原の人が知る千空さんは一体どのような経緯で「東北に千空あり」と称えられるに至ったのか。

企画展の前半では成田千空が俳句を志したきっかけ、戦時中にも行われていたという青森市での俳句活動、また俳句の師となる中村草田男について解説され、太宰治や寺山修司との関わりも紹介されました。各受賞関係の品や遺品の数々、直筆作品としては俳句の他に巧みな絵も出展され、見応えのある展示となりました。後半では「成田千空と永住の地 五所川原」と題し、代表作「大粒の雨降る青田母の故郷」が生まれた背景、五所川原俳句会の初期のようす、また千空さんと関わった五所川原の人々が紹介されました。

平成二十六年十月十一日から十一月二十四日の会期中、実に多くの方々に来館され、日曜講座は満席、ゆかりのある方々からの新たな資料や証言も寄せられるなど、今後につながる企画展となりました。私は企画展への関心の高さを目の当たりに

にし、成田千空は青森県を代表する文学者であるという認識を新たにしたのでした。

この企画展が私にとって特別なものとなった理由はもう一つあります。それは、企画展の後半「成田千空と永住の地 五所川原」の展示のため自ら取材をする中で多くの方々との出会い、興味深いお話を伺うことができたことです。

偶然にも平成二十六年は五所川原市合併十周年で、県内外へのPRにもなると市からは積極的なご協力をいただきました。五所川原の立佞武多の館からは一階展示室入口に掲げられていた千空直筆による書額三点とミニチュアの立佞武多をお借りし、文学館で展示させていただきました。ミニチュアといってもなかなかの迫力で、これは県内外のお客様に好評でした。千空直筆の書が立佞武多の館に掲げられていることを皆さんはご存知でしたでしょうか。これは五所川原市が大型観光施設のオープンにあたり、名誉市民である千空さんに依頼した特注品で、今回初めて壁から外され館外へ貸し出されたのでした。「今生を燃えよと鬼の佞武多来る」など、まさに風土を主体とした作品の気迫に満ちた書は、企画展示室の大型ガラスケースに展示され、来館者の目を引きました。(立佞武多の館でぜひ一度ご覧ください。)他に代替えのない貴重な品々を長期にわたり快くお貸し下さり、五所川原人の心意気を感じました。また市の広報への情報掲載など各課のご理解をいただくことができたのでした。

戦後、千空さんが五所川原で帰農生活を送ったという旧飯詰村を案内してくださった五所川原俳句会の松宮梗子さん、五所川原俳句会の初期の頃から深い関わりのあった對馬鳴月、暉子さんご夫

妻や千空さんにとって

忘れがたい五所川原人である医師・増田桓一さんのご

家族の皆さん、若き日から千空さんをよく知る地元出版

社の佐々木達司さん。親しい間柄の方、お名前はよく存じていた方

でも、千空さんを介すると全く別のつながりが見えてきました。(これらの興味深いお話については、次の機会にご紹介したいと思います。)皆さんから貴重な品々を展示品としてお預かりする際、企画展の意義を説明すると逆に驚かれて、感動を共有することもありました。お話を伺った私だけではなく、取材させていただいた皆さんにも新しい発見や関心が生まれたのでしょうか、期間中皆さんが文学館まで足をお運びくださったことは大きな喜びでした。

手探りの取材を進めるうちに、もともと五所川原には文化活動の歴史や新興の文芸運動があったこと、そうした五所川原の動きの中で千空さんご自身も文学的影響を受けていったこと、またその



後も千空さんの才能を支え続けた人々がいたことなど次々と知ることができたのでした。五所川原は近代に入り商業の都として活気を呈した商人の街だと聞いていましたが、実は文学を愛好する人も少なくなかったようです。この土地の人がその良さを知り、誇れることは大切なこと——そんなメッセージを込めて五所川原のコーナーをまとめられないかと構成を考えました。

ミニチュアの立佞武多はその象徴としてフロントで来館者をお迎えしました。毎朝明かりをつけると、そこに五所川原の空気が流れました。明治時代の立佞武多を復元したことから、現在の大きなまつりに発展したように、企画展「成田千空」からまた何かがつながっていくことを期待しています——と私はパネルの最後に書き添えました。

こうして無事に企画展「成田千空」は閉会したのですが、私の中では千空さんや五所川原という街への興味に火がついてしまったという感じでしょうか。二十六年間過ごした五所川原について、千空さんとの関わりを通してもう少し知りたいと思いはじめています。

文学館の勤務で作家の資料にあたる時、その作家を直接知る人々が書き残した記録は重要だと感じました。どんな小さなことでも、それが作家の人と作品を理解する手がかりになります。地元五所川原で成田千空に関わった人々の記憶の数々を書きとどめ、ひとつの形にすることは価値のあることになるでしょう。そうした取り組みのお役に立てればと考えています。

一月厳寒の最中、青森に向かう車から、今日はすっきりと岩木山が見えています。

(青森県近代文学館解説員／五所川原市)

回想の成田千空

大いなる魂

佐々木あさ子

二十五年ほど前、南小学校に勤めていた頃、八幡様の子どもの森読書会で山谷清さんに頼まれ、東京で全国の読書団体の会合に参加した。発言の際に五所川原からの参加だと先ず名乗った。レセプションに移り、一人のご婦人に、

「千空さんの五所川原ですね」と話しかけられた。萬緑の同人の方なのだろう。くれぐれも千空さんによるしくとのこと、帰ってから、新町のお店に伝えに行ったらご夫妻でとても喜んで下さった。

私が柏原の山友の嫁だと知ると、義兄の承定との交流についても懐かしく話された。義兄は絵を描いていて、柏原の家の二階には文化活動のお仲間が集まっていたらしい。義兄が岐阜で亡くなった後も、千空さんは五所川原でも個展を開かれなにかと案じて下さっていた。

夫は憲法九条の会の活動をしているが、二〇〇五年七月、西北五九条の会の発足にあたり、千空さんに世話人の依頼に伺っている。そのお願いに対して、「文化活動の一環である」と快諾していただき、「戦争は非文化」という千空さんの思いが感じられたという。

その後も数回お尋ねし、ご夫妻とお話する中で、奥様が勲章の事を話された。

何でも、年に一度古本屋の店の片付けをして下さる方が居て、その方に千空さんは、

「そこいらへんに勲章があるはずだから、それは捨てないように気をつけて下さい。くれた人が気分悪くするといけないから」とおっしゃるのだとか。あの平積みの本の山の中に埋もれている勲章が大事なのではなく、人の気持ちの問題という。いかにも千空さんのお人柄の表れている話ではないか。

また夫婦喧嘩の際に、奥様が一方的にまくしたてても、千空さんは一言も返さず、じっと悲しそうな顔をしているだけなので、奥様も怒りの気持ちが失せてしまうのだとか。

九条の会で毎月発行している通信十八号は「成田千空氏ご逝去」の見出しで、次のような文章で結ばれている。

「葬儀の際、市子夫人が氏の辞世の句を発表された。

寒夕焼けに焼き滅ぼさん癌の身は
俳句門外漢の筆者は、肅然と襟を正した。
癌と真っ向から闘い肉体を消滅させ魂（精神）
を活かす気概を感じたから。これは具体的に
は千空氏に連なる人々の精神再生を鼓舞する
句に思えた。死者・生者をいかに。清貧の中、
俳句一筋に人生を生きた巨人が逝った。」

（注 筆者は夫のこと）

戦争と病に翻弄されながらも俳句の世界で自分の意志を生涯貫き通した千空さん、残された者それぞれに学ぶべきものいかに大きな人ではないかと今にして思う。時既に遅し、何と愚かなことよ。

（青森県アニマシオンクラブ代表／五所川原市）

生命の俳人

上條勝芳

成田千空氏（大正十年三月三十一日〜平成十九年十一月十七日）の死去の報を新聞紙上で知った後、平成十三年発行の『文芸あおもり』第百四十八号の村次郎特集号を再読してみた。千空対談の「村次郎を語る」で詩人の中寒二氏（故人）と対談している。詩人の先達としての村次郎氏を「生命の詩人」と評し、純粹な精神性を讃えている。成田千空氏も「生命の俳人」ではないだろうか。

昭和二十三年に俳誌『萬緑』（中村草田男氏主宰）に発表された「大粒の雨降る青田母の故郷」は、代表句であり、自然の生命力があふれている。生命讃歌が聞こえてくる。敗戦後の人間の復興への活力も感じることができる。昭和十四年に青森工業学校卒業後、東京で就職するが、肺結核のため十六年に帰郷する。青森での四年にわたる療養生活での死の意識や昭和二十年七月二十七日の青森空襲での体験（平成十七年発行の『文芸あおもり』第百五十二号の「私の中の戦争」で私の戦争体験の頂点である。戦争の地獄を見つけたのである、と記している）後の、母の故郷である飯詰村（現在の五所川原市）での五年にわたる帰農生活が背景にあるのだろう。その後、隣町の五所川原に移って古書店を開く。

三周忌を目前に出版された、生前に発表したエッセーを収録した『俳句は欲びの文学』（角川学芸出版）で、次のように回想している。

昭和二十二年の作です。田の三番除草をした後、俄か雨が降って、青田がいっせいにざわめきました。青田のざわめきが広がって、いきいきとした大地の息吹を感じ、何の作為もないままに、一句が生まれました。手帳も鉛筆もなく、大粒の雨に濡れながら、口を衝いて生まれた句です。青森空襲で地獄を見てしまった心が、一転して母郷の青田の生気に触発された句だったと思われます」

(初出『俳句研究』平成十三年八月)

成田千空氏の作品には、人間の根源を追究する、書く必然を感じる。理事長として最期の出席となった平成十九年七月二十九日の青森県文芸協会の総会でお会いした時、「生きていて良かったと思えるような作品を書き続けることが大切です」と話されていた。

千の空を羽ばたいている千空氏に、どう生きていくかが問われているようだ。

*平成二十年発行の『文芸あおもり』百五十五号に掲載された作品を加筆訂正。

(詩誌「風塵」主宰／八戸市)

千 空 忌

清 水 雪 江

私のパソコンの前にいつも貼られているのが、以前俳句雑誌『俳句』新年号に掲載された「個室」の句である。平成十九年十一月十七日千空氏が亡くなられ絶筆となった八句である。市子奥様が

が口述筆記されたそうである。

個 室

清涼水鼻に突きぬけ命なり
子を連れて小鳥来てゐる声がする
月は無く夜勤介護士吾子のやう
秋白き癌の錠剤儚なしや
凄まじき月光となる個室かな
ベットにも崖つぶちのあり秋夜寒
寒夕焼に焼き亡ぼさん癌の身は

当時萬緑青森支部『未来』の編集をしていたためお見舞いが時々先生の病室を訪ねていて先生の状態、病室の状況は今でも目に焼き付いている。掲句はどれも身に沁みる句である。奥さんはもちろん、先生の妹さんが泊まりで看取っていた。いつ行っても師は苦しい顔を見せなかった。未来の原稿をベットの上で書いてくれた。

私らにとっても萬緑にとってもまさか、まさかの死。もっと生きて欲しかった。

茶毘の日、お通夜、お葬式と十一月なのに雪が降り真冬のように荒れていた。あれから今年で七年目、七回忌である。早いものである。

今年の千空忌に三日早めの墓参りをした。墓地のお店は三軒だけ開き、客が少ないせいか店先に駐車したとたんに店主三人の愛想良き呼び込みである。一瞬困ったが駐車場に一番近い真ん中の店に入る。師の好きそうな、また七回忌に相応しい花をお願いする。市子さんによれば天候を考え早めの七回忌を済ませたというが供花は無くちょうどよかった。

昨年の千空忌の墓地はどしどし降りだった。車から降りた場所が違ったため探し回ったが見つからず、事務所に尋ねたが知らないという。成田家の住所は古川一丁目の夜店通り、調べても解らない。棟方志功と成田雲竹はパソコン入力されていたが、成田家の墓は見つからない。千空師は全国的にも俳句で有名である事を力説し、パソコン入力をお願いする。友人に携帯電話で問い合わせたところ、花屋の右側の坂を下りまもなくだった。

立派な花がまだ咲いていた。墓地には思いがけない先客。青森市のT・Sさんである。雨の中三人で師を語り、供物のお酒を回し飲み、お菓子、果物を食べ偲んでいた。そこに成田家の嫁さんが来て、いま実家に市子さん、先生の妹さんが来ているので、どうぞ、どうぞとお誘いを受けた。ご実家には句集「兄より兄嫁大事益の家」の兄嫁以下同胞の方で賑わっていた。師は兄嫁さんのことを誉めていた。上京の折とか泊めてくれ師をとて大事にしてくれたことに感謝し、私にもよく話してくれた。兄嫁のその嫁さんの手厚いご接待を受け仏壇の師の遺影を肴に偲んでいるというよりは駄弁っていて夜が近づいているのに気付かず、雨の日の思いがけなかった、一年前の千空忌でした。

それに比べ今年の千空忌は秋晴れである。T・Sさんには会えなかったのは残念だったが句碑の笑顔が暖かそうでなによりだった。句碑は成田家の墓に寄り添うようにちんまりと座っている。句は千空師の代表句「大粒の雨降る青田母のくに」。戦後から二年後農作業に汗を流していた頃の作。俄雨が降り、青田がいっせいにざわめき、いきいきとした大地の息吹を感じた。何の作為もなく一

句が生まれた。青森空襲で地獄を見てしまった心が一転して母郷の精気に触発された句と師は語る。風土にこだわり、最後まで生まれ育った津軽を拠点に句作を続けた師。朴訥として飾らない人柄が「母なる風土と生命をうたうのが私の俳句」と語ることから句碑の句に表白されている。慈愛に満ちた師の教えは今も心の中に生きています。

句碑・墓地の影も小春や千空忌 雪江

〔萬緑〕／藤崎町

千空さんと初めて会った頃の私

櫻庭利弘

私が、成田千空さんという方を知ったのは昭和二十七年、県立木造高校の三年生に進級したばかりの春四月の頃であった。当時、五所川原新町の増田病院の真向いにあった「貸本屋」の主人が成田千空さんであった。高校生の私から見れば、ただの貸本屋の恐いおじさんだったのである。のちに名のある俳人だということがわかるのだが。

昭和二十七年の三月、木造高校の二年生だったが、滞納していた授業料三か月分を一括納入出来て、三年生への進級が出来そうであった。心配事が沢山あったが、一つ減った。冬休み中、一日一八〇円貰える海岸の護岸工事のアルバイトをして稼いだからである。働いて高校に入る約束だったのでそれは当然であるが、十六、七歳の少年にとってはそれは大変なことであった。

今はないが、木造の千代町に「大幸洋服店」と

いう紳士服の仕立て屋があった。ガラス張りのウインドーには、オーダーの背広を飾っており、一見仕立て屋とわかる構えであった。その奥まった所に、離れ座敷の一軒家があって、店の土間と細長い廊下でつながっていた。洋服店の祖父が隠居するため新築されたが、入居する前に亡くなったので、学生達のために部屋を貸していたのである。その玄関を入ると、すぐ右に三畳間の小部屋があって、そこに小学校からの同級生、米谷裕君と私は寝起きして自炊していたのである。

奥には八畳間もあって、その部屋は近村よすかから通学してくる定時制の学生に貸していた。夜、勉強が終わると数人で泊まり、仕事のために夜明け前に帰ってしまうので、会うことはなかった。台所トイレ完備。台所は洗顔と煮炊きに使用していたが、大分広いので、休日にはそこにイーゼルを立てて油絵を描いた。

汽車通学していた私は、「一緒に泊まろう」と米谷君から誘われ、その三畳間で共同生活を始めたのだ。米谷君は父親が学校長、兄は中学教師、姉は病院の婦長という裕福な家庭の末っ子、文学を志向していて、太宰治の著書はすべて読破、太宰治の写真を掲げ、その下に机を置いて、四六時中原稿用紙に小説を書いているので高校の欠席も多かった。時々、汽車で鱈ヶ沢町へ出掛けて帰らないこともあった。聞くと、鱈ヶ沢高校一年生の女の子が恋人で、鱈ヶ沢町の七ツ石町に下宿しているらしく、頻繁に訪ねていたようであった。早熟的な軟派の高校生であった。

三畳間は私が借りているようなものであったが、部屋代、自炊の費用、食料品代など、私は一度も出したことはなく、全て米谷君が支払っていた

ので、私は米谷君の体に住み付いた寄生虫のような存在であった。

授業料を納めた後、稼いだ金が少し残ったので久し振りに深浦の実家に帰ったところ、中学生の弟がひとり留守番していて、母が五所川原の増田病院に入院しているから、顔を出すようにとの伝言であった。

その次の日、私は増田病院を訪ねた。私が五歳の頃、母は胆嚢を悪くして、増田病院に長期入院したことがあったが、再発したらしく、大部屋の窓側のベッドに横になっていた。父は北海道の帯広に出稼ぎ、兄達は他県、結果的に私のほかに付き添う人がなく、ベッドの横に寝泊まりして、母と自分の食事の支度をしなければならなくなったのだ。この頃は七輪が煮炊きの主役で大変だった。春休みだったので、米谷君に連絡しないまま、増田病院の病室での生活となった。母の病は軽い方なので、付き添いしても苦労はなかったが、四月になっても退院の気配はなかった。私は木高の三年生へ進級し、米谷君と会い、増田病院から通学することを知らせたのであった。

病院での生活は、食事の支度をした後の時間が退屈した。日曜日は特に退屈した。そこでベッドの横で油絵を描いたり、上村君から貰った俳句の本を読んだりして時間を費やした。

二年生まで一緒に俳句をしていた上村忠雄君が、大戸瀬駅長だった父親が能代へ転勤となり、彼も能代高校へ転校した。上村君の居ない俳句づくりも、詩作も本気になれなかったのだ。絵は描いていたが美大への受験の金はない。米谷君は駒澤大学の文学部に受験すると決め、張り切って原稿を書いていた。

どうしたらよいかわからず、悶々としていた私は、選択肢の見つからない高校三年生であった。日曜日は行くところもなく、ベッドの横で俳句の本を読んだり、油絵を描いて過ごした。

ある日曜日の午後、俳人である増田桓一先生が回診に来て、母の体を診た後、描いている静物の絵を褒め、絵の具箱の上にあった俳句の本を見たのか、

「櫻庭君は俳句もやるのかい。向いの貸本屋の主人は成田千空という俳人だよ。俳句の本もあるので行って見たら」と、すすめてくれたのである。

その後、早速、貸本屋を訪ねたのである。間口が少し広く、奥の方に本棚が並んでいて、本が沢山目に入った。その左隅に机があって、貸本屋の主人が眼鏡を掛け読書をしていた。怖い顔をしているので声を掛けることが出来ず、その時は、ろくに本棚の本も見ないで病室に帰ったのだった。

次の日曜日の午後、また訪ねたのである。思い切って、俳句のことを切り出した。

「増田先生から聞いて来ました。木造高校の三年生です。櫻庭です。母が入院して付き添いをしています。俳句を教えてください。弟子にしてください」。急に優しい表情になって、千空さんは言った。

「俳句はやめた方がいい。もっと何かやっているものがないのかね」

「油絵を描いています」
「油絵はいい、それをやりなさい。好きな本があったら持っていいよ。増田病院に居るのだったら、また遊びに来なさい」

私は何も言うことが出来なかった。その後、何度も訪ねることになるのだが、俳人成田千空さん

と、初めて話を交わした日であった。

(画家・私設 櫻庭利弘美術館館長／五所川原市)

千空先生への感謝

高橋 睦子

西郡で仕事をしていた二十代の頃、鱒ヶ沢の駅前の書店で、成田千空さんの本を買い求めたことがありました。

レジで店主さんに、若いのに俳句に興味があるのかと聞かれましたが、うまく返答ができませんでした。というのも、千空さんの本を手にしたのは、大変個人的な理由によるものだったからです。私の父は、昭和三十三年に三十九歳で他界しました。

父が亡くなったあと、同じ俳句会の方々が『もがり笛』という遺句集を作ってくださいました。同時代に亡くなった方お二人と父、三人のための遺句集でした。その編集をくださったのが千空さんだったのです。俳壇でどんなに活躍されている方かも知らないまま、父につながる方だとの理由だけで買い求めたのでした。

父については、親戚から「父さんは、嫌いな人がくると、炉に背を向けて生米ぼりぼりかじって、口もきかなかったもんだ」などと聞かされ、融通のきかない依怙地な人だったのだろうかと思つたものでした。しかし『もがり笛』の中の句からみえる父は、ちがいました。

「冬ぬくき試歩の一と日をさづかりし」

闘病生活の中で生きる希望を失わなかった父がいました。

「吾が傷痕つゝむジャケツを妻が撰る」

母を思うあたたかい眼差しの父がいました。「地表凍て人が人撃つこと習う」

理不尽なことに怒りを持つ父がいました。『もがり笛』を読むたび、父の情や精神に触れ、決して依怙地なだけの人ではなかったのだと、励まされてきました。

『もがり笛』におさめられている父の句は六十八句。手帳や雑誌の余白に、メモ書きのように書いてあったという句の中から六十八句を選び、懸命に生きた父の像を浮かび上がらせてくださったのは千空先生です。

一度もお会いする機会はありませんでしたが、「奥田雨夕の娘です。私も姉妹に『もがり笛』を残していただき、本当にありがとうございます」と御礼を申し上げたかったです。

(主婦／五所川原市)

行合岬に句碑建立

草野力丸

成田千空さんが目を細めて、白い睫毛をパチパチさせながら大喜びをしたシーンが今でも鮮やかに脳裡に蘇ってくる。

思えば昭和六十三年、深浦町民の森八森山公園の一角に私たち深浦俳句会員の小さな句碑を十二基建立、気を良くした私たちは、いつも師と仰ぐ千空さんの句碑を建てようという話がまとまり、

早速千空さんに色紙を書いていただき、その色紙を携え、地元の成田石材店に工事の一切を依頼。

一方、土地の所有者である広戸地区の代表者と交渉を始めた。この何れにも及ぶ広大な土地は、広戸地区の人たちが昔からの馬の草刈場として使用し、入会権を持っていた。何回か交渉をした結果、深浦俳句会との間に永久借用の書面を取り交わすことができたのだ。

平成元年七月、津軽国定公園の中核を担う深浦海岸の風光明媚な行合崎に千空さんの

「行き合はん岬は草の花だたみ」を建立したのである。

句碑序幕に代えて、深浦の濶口観音海の祈禱寺で知られる円覚寺の住職海浦曉観に御祈禱をして頂いた。住職は山伏姿に衣装替えをした。頭に多角形の帽子のようなものに紐で結んだ頭巾をつけ、麻の行衣、海之紋というザイルに似た腰紐、そのうしろの部分に鹿の皮を用いた引敷ひしき（衆生を法界に引導する意味がある）を纏い登場したのであった。

御祈禱は、地鎮祭と句碑の開眼と二つの儀式が執り行われたのである。法螺貝を空に向かって鳴らした。じつに厳かな響きであった。この法螺貝は釈迦如来の説法であり、この音を聞くものは煩惱を滅し、悟りを得るのである。法螺貝の音は獅子吼と呼ばれ、百獣の王の声であり、すべての動物を服従せしめる威力を持つ意味があるとのこと。みんな畏まり、山伏の動きに眼を瞞まどっていた。すると寶劔ほうけんを莢から抜き、エイエイと気合を入れて空を切った。張りつめた空間が流れ、前後左右剣を振り切ったように記憶している。千空さんはこの行為が終わった時、込み上げてくる感情を抑えていたに違いない。目をしばたいたいた。喜び

に満ちあふれた眼であった。じつに綺麗な眼の輝きであった。後で知ったのだが、句碑の土地を借りるため、その土地の神々に許しを乞うとともに邪鬼を払う儀式だったのである。また、法螺貝が鳴り響き、句碑開眼の儀式が執り行われた。なにがどうであったか記憶は定かでない。とにかく静粛にして、みんな畏まっていた。一時間内外でお払いと魂入れは終わった。

供物やテーブルの後始末はみんなに頼み、千空さんを五所川原まで、私の自家用車で送って行った。千空さんがこんなに喜んだ姿を見たことがなかった。法螺貝の響が余韻を引きずっていた。空



を切る剣の音が耳にいつまでも残っていた。千空さんはしきりに山伏姿の住職の話話を話しかけてきた。声が上がっていた。初めての体験だという。感謝感激の絶頂を往き来する様子が伝わってきた。東奥日報朝刊八月一日付は、次のように報じていた。「成田千空氏の句碑行合崎海岸に建立 深浦俳句会」の見出しを付け。

西郡深浦町の景勝地、行合崎海岸に五所川原市在住の俳人、成田千空氏の句碑が建立された。

千空氏は句集「人日」で今年の俳人協会賞に輝き、昭和六十二年度の県文化賞受賞者。俳誌「暖鳥」「萬緑」に所属し、現在「萬緑」では中村草田男ら亡き後を受けて選を担当するなど支柱として活躍している。

句碑は千空を師と仰ぐ深浦俳句会（草野力丸会長、会員十二人）の人たちが「いろいろ指導を受けたお礼に」とニコウキスゲが群生する風光明媚な行合崎海岸に建立した。大きさは縦六十センチ、横一・二メートル、台座三十センチ、インド産みかげ石でできた句碑には行合崎を詠んだ「行き合はん岬は草の花だたみ」の句が刻まれている。

序幕式は千空氏を招いてこのほど行われ、深浦町円覚寺の海浦曉観住職や会員らの手で序幕した。

立派に完成した句碑という写真説明があった。写真は当日参加全員が句碑を囲んでの記念写真である。千空さんの嬉しい顔は、数限りなく見えてきた。しかし、この日の喜びは格別で、突出した喜びようであったとつくづく思う。

（青森県俳句懇話会事務局長／深浦町）

思い出・断片

藤田健次

私が成田千空さんと初めて出会ったのは、一九五八年、今から五十七年前のことである。

当時、五所川原職安に勤めていた私は、近くにあった書店へよく雑誌を買いに行った。それが、千空さんが経営する成田書店だった。千空さん三十七歳。狭い店の右側にある炬燵に入りながら、いつも下を向いて、なにかを書いたり読んだりしていた。壁には額や短冊が無造作に飾られていて、私は、その額の中の独特のタッチのペン画が気になり、「この絵は誰の作か」と聴こうと思いがながらも聴きだせずにいた。真剣に何かを思索している風のこの店の主には、軽々しく口をきけない雰囲気があったのである。

俳句のことは全く無知な私には、このメガネをかけて本屋さんをやっている人が、そのころすでに第一回萬緑賞を受賞し、将来を嘱望されている俳人であるとは知るよしもなかった。

こうして、千空さんとは、本を売る側と買う側の、必要最小限の会話以外は話をする事がないうまま、私は八戸へ転勤してしまう。

千空さんと私が再び会話したのは、それから二十年ほど経ってからである。一九八六年、千空さんは青森県文芸協合理事長に就任、同時に私は理事に就任。それ以降、千空さんが亡くなられるまでの約二十年間、一緒に過ごすことになる。

しかし、私は、理事を引き受けたものの名ばかりの理事で、単身赴任が長く続いたこともあるが、それよりもなによりも、むかしからのわがまま男、それに加えて人嫌い、パーティ嫌い。理事としての行事を欠席ばかりしていた。

そんな怠け者の私なのに、千空理事長のもと、文芸協会は、私の版画作品である『絵本 南部のわらべうた』、『うたえほん 夕焼け空』(共著)、さらには、久しく絶版になっていた『絵本 津軽のわらべうた』(改版)の三冊を出版してくれたのである。

『絵本 南部の……』は現代童画展で奨励賞を受賞後、八戸信金のカレンダーにも転用されて全国信金カレンダーコンクール最優秀賞を受賞。『うたえほん……』は、その原画で出版美術学研賞を受賞する。また、『絵本 津軽の……』の方は、初版のときすでに第一回子ども世界童画賞を受賞していたから、私の絵本の代表作をまとめて世に出していたのだということになる。

受賞のあとに開かれた理事会で、私は、そのことを報告しながら、理事のみなさんに心からの感謝を述べた。千空さんは目を細めて、わがことのように喜んでくださり、そのやさしい笑顔は今も忘れない。

それから間もなく、千空さんは他界される。最初に千空さんに出会ってから五十年が過ぎていた。今、手元に、千空さん直筆の俳句の色紙が一枚ある。

・ さなぶりの川ゆつくりと日が暮れる

畳紙を開き、この色紙を見るたびに、自分が生まれ育った町・鶴田の風景が目の前に広がる。この川は、鶴田を流れるあの水量豊かな岩木川。左側には、ゆつくりゆつくり夕闇に包まれていく岩

木山。私は、一年の四季の中で、なかなか暮れようとならない、さなぶりのころの黄昏どきが一番好きだった。

この句を版面にしようと思う。この句も含めて十二点ほど彫り、「千空版画集」にしたい。千空さんの奥深い世界には、足下にも届かないのは百も承知。少ないお付き合いではあったが、日本を代表する俳人と出会えたことに感謝しながら、まずは一枚、彫刻刀を握ってみようと思うのである。

(版画家・現代童画会会員／八戸市)

【千空点描】

ダンチヨウさん

千空さんのことを、市子夫人が「ダンチヨウさん」と呼んでいた。団長さん? と思っただが、それは「暖鳥」のことだった。

千空さんが所属していた青森俳句会の俳誌は『暖鳥』だったし、千空さんの貸本屋の名前が「暖鳥文庫」だったから、家庭でもそれが呼び名になったのだろう。

古い季語で、小型本の『歳時記』にはない。暖鳥は〈ヌクメドリ〉と読む。〈ダンチヨウ〉は音読み。鷹は寒夜、鳥を捕えて、その体温でおのが足を暖め、夜が明けると放つてやるという。「音のせぬものの降る夜ぞぬくめ鳥」二柳、の句がある。

初出は、寛政九年(1797年)『絵本譬喩節』である。鷹匠の話では、実際にそういうことはないというから、説話から季語となったものだろう。

(佐)

成田千空著作目録①

【句集・単行本】

- 1944年 23歳
句集『海流』（共著）青森俳句会
- 1956年 35歳
句集『現代俳句集 2』（共著）琅玕洞
- 1958年 37歳
『現代俳句全集』第4巻（みすず書房版）
入集
- 1961年 40歳
句集『修羅落し』（共著）森の会
- 1962年 41歳
句集『風祭』（共著）森の会
前文、「冬越す芽」49句、句集の後記を執筆
- 1963年 42歳
句集『氷塔』（共著）森の会
- 1970年 49歳
『成田千空句集』海程戦後俳句の会
- 1976年 55歳
『地霊 成田千空句集』青森俳句会
- 1988年 67歳
『句集 人日』青森県文芸協会
『句集 地霊』（再版）青森県文芸協会
併せて『人日』特装版（額装色紙付）発売
- 1994年 73歳
『句集 天門』青森県文芸協会
- 1997年 76歳
『句集 白光』角川書店
- 1998年 77歳
『句集 白光』青森県文芸協会から再版
併せて『人日』『地霊』『天門』『白光』付録「対談 俳句の原点を語る／略年譜」を箱入りセット発売
- 2000年 79歳
『句集 忘年』花神社
- 2002年 81歳
矢本大雪編『千空歳時記』青森県文芸協会
- 2007年 86歳
『句集 十方吟』角川書店

- 『成田千空序文』草野力丸編 自刊
- 2009年 没後2年
『俳句は欲びの文学』角川学芸出版
- 2011年 没後4年
脚注名句シリーズⅡ-7 『成田千空集』萬緑会編 俳人協会

【文芸おもひ】

- 『月刊総合誌おもひ』として創刊、第1
16号より『季刊文芸総合誌おもひ』、
第135号より『文芸おもひ』と改題。
- 1969年 48歳
「雑唱」10句 第6号
- 1972年 51歳
「本流」10句 第32号
- 1973年 52歳
「砂山」10句 第42号
「渴の村」10句 第51号
- 1974年 53歳
「心頭」10句 第55号
「声」10句 第61号
選評「津軽山河考」を推す 第72号
- 1976年 55歳
「八甲田にて」10句 第75号
「現代な俳句」第82号
- 1978年 57歳
「燈」10句 第88号
「第7回文芸新人賞選評―今後の成長に期待する」第91号
- 1979年 58歳
「虚空界」10句 第97号
「第8回文芸新人賞選評―真実観のある俳句」第100号
- 1980年 59歳
「家郷」10句 第106号
第1回青森県文芸協会賞受賞により、グラビア・選評・「成田千空小論（新谷ひろし）
・受賞のことば」・「俳句抄（自選百句）」
第109号

- 1982年 61歳
「水の旅」10句 第120号
- 1986年 65歳
「風土と俳句」第129号
- 1987年 66歳
「青森県文芸協会賞受賞―船水清氏について」第130号
- 1990年 69歳
「青森県文芸協会について」第134号
- 1991年 70歳
千空対談①「虚子の教えを俳句の心として―増田手古奈」第136号
「青森県文芸協会賞受賞 常田健小論―ほんものの百姓を描く画家」第137号
- 1992年 71歳
千空対談②「思い出の中の太宰治―小野正文」第138号
- 1993年 72歳
千空対談③「津軽文化の掘り起こし―船水清」第140号
- 1994年 73歳
「南紀行」20句・「青森県文芸協会賞受賞 木附沢青氏について」・千空対談④「寺山修司の俳句―京武久美」第141号
- 1995年 74歳
千空対談⑤「多彩な芸術表現―小田原金二」
・講演「俳句と川柳」第142号
- 1996年 75歳
千空対談⑥「父・山蘭を語る―和田現」
第143号
- 1997年 76歳
千空対談⑦「青森の作家を語る―小山内時雄」第144号
- 1998年 77歳
千空対談⑧「戦後俳句の流れの中で―浅利康衛」・「光陰」10句・作句観「確かさ」
第145号
- 1999年 78歳
千空対談⑨「大塚甲山を語る―きしだみつお」・「三十周年に当たって」第146号
- 2000年 79歳
千空対談⑩「高橋竹山を語る―佐藤貞樹」

- 第147号
- 2001年 80歳
千空対談⑪「村次郎を語る―中寒二」第148号
- 2002年 81歳
千空対談⑫「小説と俳句―服部進」第149号

- 2003年 82歳
千空対談⑬「風土からうまれる短歌―中村雅之」第150号
- 2004年 83歳
「蘇生―入院前後一五四句」第151号
- 2005年 84歳
「第1回青森県文芸選評」・「随筆／私の
中の戦争」・文芸選評 第152号
- 2006年 85歳
「第2回青森県文芸感想」・「千空が語る
故郷と文学―聞き手／野沢省悟編集長」・
「俳句再録 はまなす紀行」・文芸選評
第153号
- 2007年 86歳
「第3回青森県文芸選評」・「戦後青森県
の文学状況 俳句会の動向」・文芸選評
第154号

成田千空資料再録①

句集『もがり笛』後記

三人の遺稿を整理していたとき、いくたびか心を掠めた声があった。その声が何であるか、しばらくはつきりしなかった。遺稿はすでに印刷化されたものより、手帳の片すみや、雑誌の余白や、事務用紙の片はしなどに書きとめられたものが、上手下手はともかく、生活の中の声を伝えているように思われた。彼らは俳句作者である前に、じつに汗みどろの生活者であったことはあきらかである。雨夕は公民館の主事として。北洲は小学校の教頭として。鮎太は印刷会社の専務として。それぞれの職場のエキスパートであり、じつによ

働いた。そして彼等の死は申し合せたように唐突であり、その由因は過労にあつたことを思えば、彼等は彼等の時代と生活に忠からの誠意をもつて直面し、とり組んでいたことがわかる。雨夕三十九才。北洲三十七才。鮎太三十九才。彼等の短い生涯の中で、更に俳句にかけた時間はごく限られたものであつたにしても、俳句は彼等にとつて等閑の具ではなく、生活の渦の中にひらめいた、ある日ある時の誠意の声であつたことは疑う余地がない。純芸術的な基準でこれらの作品を区別するより、彼等の生の証(あかし)がここに示されていることを確かめれば、それでよいと思う。あの多忙な彼等が事務用のメモや雑誌の余白にまで句を書きとめていたことだけでも、この烈しい時代に生きる者の、失なつてはならない一と筋の心を示したものと、尊重したい。ぼくの心を掠めた彼等の声はもがり笛に似ていた。

『もがり笛』とは、冬の烈しい風が棚や垣などに吹き当つて笛のような音を発する、あれである。『虎落』(もがりの)語は又、古くは、死者の魂がまだ身体から離れていないと見なされる期間、生人としての待遇で、別の場所に据えられるとき、その場所をかこう困いのことであると謂われている。むろん彼等はすでに葬むられた。しかし目の前にある遺稿の断片には彼等の心が生きている。生活に堪えながら、少しでも真実を表現しようとした彼等の心。それだけが生きて

人の家継ぐ身二月の凍てきびし 雨夕
地表凍て人が人撃つこと習う
署名乞いゆくどの家も同じ雪庇
走り穂へ折々父のわらべ唄 北洲
青虫の青き糞跡原爆忌
声挙げて樹水の子を呼ばん
刹那々々生きゆく心球根植う 鮎太
垂氷太る日々印刷機音単調

向ひ東風妻を心に急ぐなり

この『もがり笛』一巻を、所謂俳壇に伝えるより、彼等を知りながら、彼等の俳句を知らないでいるこの地方の人々に伝え、彼等の心を受け継ぐ人がこの地方から一人でも多く現われることを祈りたい気持ちである。

昭和三十五年七月

成田千空

遺句集『もがり笛』

昭和35年8月30日刊行 (非売品)

著者 菊池鮎太、奈良北洲、奥田雨夕

編輯者 成田千空

発行者 前田水馬

発行所 五所川原俳句会

印刷者 菊池清助

印刷所 陸奥印刷株式会社

合同句集『風祭』

冬越す芽／成田千空

母親の腕の中でもがく子どものように、ぼくは自分の生活の中でもがくので、生活の方がだんだん奇態になって来た。この一年、ぼくは堂々めぐりしていたような気がするが、水臭い俳句だけは作るまいと思つて来た。

鳥蝶浚漂の爪ががと開らく
濁に灼けし心一とひらの風化員
干さるゝ濁や翔けつゝ鳥が羽こぼす
羽蟻湧く破船竜骨そげそそり
小蝦のみが網に焼酎焼けの鼻
葦昏らみ来つゝある牛猪突する平
馬の鞭傷夕焼地平擦れ擦れに
空を搏つ馬の乱れ尾濁の屑藻
油紋裂き濁波しみる熱砂なり
今日を明日へ濁の白砂踵灼く
濁を擦り青田梳く風新路たり
黒穂より黒き眸光るおばこの地
おばこ一身崖負ひ戦く南瓜の葉
葉塚の巨影紅紅括びるおばこの身

青田日中の黒髪匂ふ菅笠や
油田鉄塔勁しラガーのスクラムも

畔木の瘤面伏せに田の覆面婦

夏も黒き覆面農婦乳房張らずや

詩片々畔豆沿ひに車輪の音

その日その日子どもは生きて咲く茨

己が傷吸ふ子ずんぐり葦生の子

地の余炎濯ぎ光りに農婦の指

新墾田の青張り通し空生さる

掌の形の餅食ふ家族緊まる闇

日景れば駱駝めく山水車踏む

拓く一地身を絞り鳴く懸果鳥

夜の符牒火蛾分ち栖む湿地の民

板子一枚倭武多太鼓のやむなき夜

祭太鼓間近かに鍋の耳熱し

祭雑沓地より木々の濁き立つ

蚊ゆらゆら顔を拭き消し描く眉

ばか貝といふ大貝のかすり傷

夏帽の広つば歪め恋盛り

炎天をゆきやまぬ歎歎誰が母ぞ

今日灼けんスラム路傍に煮炊きの火

軍鶏を飼ふ穢土や雨だれ石を穿ち

海猫群れる空が過重の葉の屋根

手袋と水母ただよひ皺む海

髪切虫仮眠の母の泣黒子

母は喜寿数蚊もはづみ米搗く音

帰燕離々水引き車泥曳きつゝ

鶴の行方眼ナ路のかぎり白汀

子の嘘は子の夢岩を縫ふ螢

まこと聖夜の揺がぬ黒眸赤ん坊

学ぶ紅顔冬あたくかな木槌の音

回想一句

大竹数行く道は去る道なるか

数に一矢の春灯。そのもの娶りの灯

苗天秤野の平らぎを身一つに

満たたる馬の臀見え冬越す芽

合同句集『風祭』後記／成田千空

一昨年の「葉脈」、昨年の「修羅おとし」に続いて、今年は更に具俳壇の新人層から戸館慶子、平山五朗、きた・くみ子、安田知茅等が参加した。そして私たちのグループを仮に「森の会」と名づけることになった。おとぎばなしの会のように良くないという意見もあるが、それぞれ世代も生活も作風も異なる連中が一年間の実作を示し合い、語り合い、励まし合い、そして更に新しいエスプリをこの北方の地にはぐくもうとする者たちの集りであるから、会の名前など今後何度でも変えればよい。私たちは結社をつくらうとは思っていない。又、どのみちセクト主義はとらない。おのおのが信ずるみちを歩きながら一年にただ一度ここに出会うのである。

私たちの仲間は例外なしにみな善人の顔つきをしているが、実質はなかなか強情でねばりつよいので、誰が何時頭角をあらわすかタングエイすべからざるものがある。今年、村上しゆらが「鶴」賞、新谷ひろしが「あざみ」賞、立石月歩が「季節」新人賞、戸館慶子と京武久美が「暖鳥」賞というぐあい、たて続けに賞づいた。よろこばしいことだが、それであつさり満足する俗ッ気を私たちは持ち合わせていない。

私たちは私たちの風土に生きていることはいうまでもないが、より生々しく現代に生きていることを自覚する。従って、風土だけを売りものにしてしようとする者はいないし、無批判に現代の流行を追う者もない。ただ、理論と方法をそれぞれの実作過程で確かめる必要がある、今後努めて本格的な仕事をしたいと思つておられる。

句集風祭(かまづり)限定二百部、No.44／
頒価三百円／昭和三十七年一月一日発行
／編集人村上しゆら／発行人豊山千蔭／
発行所青森県八戸市番町五番地村上方・
森の会

目次

発会にあたって	佐々木 達司	1
千空略歴		1
青森県近代文学館 企画展 「成田千空」を振り返って	齋藤 美穂	2
〈回想の成田千空〉		
大いなる魂	佐々木あさ子	4
生命の俳人	上 條 勝 芳	4
千空 忌	清 水 雪 江	5
千空さんと初めて会った頃の私		
	櫻 庭 利 弘	6
千空先生への感謝	高 橋 睦 子	7
行合岬に句碑建立	草 野 力 丸	7
思い出・断片	藤 田 健 次	9
〈千空点描〉ダンチョウウさん		9
〈成田千空著作目録〉①		
句集・単行本		10
『文芸あおもり』		10
〈成田千空資料再録〉①		
句集『もがり笛』後記		10
合同句集『風祭』		11

千空研究会の事業

- ① 詳細な年譜の作成
- ② 千空俳句データベースの作成
- ③ 関係資料の収集
- ④ 関係者からの聞き取り
- ⑤ 会報『千空研究』の発行
- ⑥ 『評伝 成田千空』の刊行

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。これは没後十年記念『評伝 成田千空』の資料として集めているものです。千空さんを知る皆さまのご協力をお願いいたします。

テーマ 左のいずれかで400字詰め原稿用紙5枚

(2000字) 以内。

① 千空さんの思い出

② 千空先生から教わったこと

③ 千空俳句について

④ その他(内容は自由)

* テーマごとに、何回かに分けてお書きください。締め切り 第2号は4月末、到着順に掲載します。

* 稿料は差し上げられませんが、掲載紙をお送りします。

送先 〒037・0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版

TEL 〇一七三・三五・五三三三

* Eメール sasaki@abungei.co.jp

会員を募集しています

会報『千空研究』は執筆者・会員と文学館に配布しています。継続配布をご希望の方は会員としてご登録ください。会費は年1000円です。

ご入会とご連絡いただいた方には、会報と一緒に振替用紙をお送りします。

【現在の会員】 上條勝芳、藤田健次、清水雪江、佐々木達司、佐々木とみ子、野沢省悟、吉田州花、泉風信子、齋藤美穂、櫻庭利弘。

☆北極星☆

○成田千空をどう呼んだらいいか迷った。千空氏では堅い、千空先生では俳句の弟子のようである。結局、呼びなれている千空さんでいくことにした。身近な人はみんな、親しみをこめて千空さんと呼んでいた。

○評伝のことは前からの念願だったが、なかなか機が熟さなかった。青森県近代文学館の企画展「成田千空」を見て考えた、評伝を出すなら今しかない。千空さんの年86歳まで生きたとして、わたしの寿命はあと4年。それに今なら関わった方々の声が聞けると。

○千空さんは俳句だけではなく、他の文芸や絵画にも造詣が深かった。多面体である千空さんをいろんな面から捉えたい。市町の人々に愛された千空、佞武多好き、酒好きなど津軽衆の千空さんを描きたい。

○考えてから走る人と、走りながら考える人がいるという。今は時間が限られているので、とにかく走り出すことにし、企画展のあとすぐに動き出した。そんなわたしを見て、千空さんは空の上で苦笑しているかもしれない。

○実現のために、皆さんのお力添えをお願いしたい。

2015年2月15日発行
会報『千空研究』第1号

非売品(会員配布)

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達 司

〒037・0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173・35・5323
FAX 0173・35・8414